

特集コラム 星槎グループのコロナ禍への対応と課題

## 交流や学びを止めない —国際交流の取組みと意義—

坂 田 映 子

身の回りに突然現れた非日常。新型コロナウイルスを恐れながら過ごす日々。時代は、コロナ禍によって、ますます行き先不透明になりつつある。開発途上国では以前から生じていた貧困や差別、紛争など一層浮き彫りになってきている。

附属国際交流センター運営委員会は、「共生社会の実現」を目標に掲げ、貧困や差別を超え、あらゆる国々と交流し、仲間になり、交流国に貢献し続けてきた。だが、今年度、ブータン王国「Royal Thimbu college (以下 RTC) Student of Trust Achievement Report (以下 STAR) プログラムの実施、独立行政法人国際協力機構 (以下 JICA) 日系研修、「SEISA Africa Asia Bridge」(以下 SAAB) 協力支援などの交流計画は見直しを余儀なくされた。感染予防に徹し、充電期間としたものの、交流を止めないために何ができるのかを模索することになった。

### 1. 国際交流を止めない

星槎大学・星槎グループの開発途上国に対する国際貢献について、「SEISA International Exchange Program 30<sup>th</sup> Anniversary Commemorative Book」(2018)によれば、交流国は、エリトリア、ブータン、ミャンマー、中国、台湾、ニューヨークなど11か国以上に及び、星槎の学生・生徒が世界をフィールドに学んだ数は、約10,230人にのぼる。星槎の国際交流のコアは仲間づくりであり、未来を担う青少年が、共生社会を目指すきっかけを作り出してきた活動実績には目を見張るものがある。現在、このような毎年の継続事業が膠着し、いつ再開するかもわからない状況が続いている。本委員会も下記の事業を見合わせるようになった。

- (1) ブータン王国 RTC 短期留学生受け入れ
- (2) 星槎からブータン王国視察
- (3) 横浜 JICA 日系研修ブラジル受け入れ
- (4) SAAB 縮小化、オンライン開催

委員会内部では、「時期を待とう、創生期に立ち返ろう、交流国との研究を進めよう」など、「交流や学びを止めない」という理念を打ち出し、オンラインという手段を模索することにした。そのような中、「オンラインで一緒にやりましょう」という話が舞い込んできた。星槎グループ FGC (世界子ども財団) と関西大学から湧き起こった連携交流である。

11月15日、関西大学が主催する「Kansai University-RTC Study Exchange Program」(15 November 2020) に本委員会から4名が参加した。ブータン王国からは、「Community Vitality

and Sustainability in Bhutanese Villages A Preliminary Case Study of Majawoong Village」というテーマでSDGsへの取組事例が報告された。星槎FGCからは、「RTC-KU Online Co-Learning Seminar 2020」、ブータン王国との10年の取組の過程がプレゼンテーションされ、互いの国の現状と課題を共有した。オンラインにより現地の人々と交流し、互いを理解し合い信頼を育むことができるという「希望」が見え始めてきた。

## 2. 「SAAB 2020」の成功

そんな中、SAABは、「世界の仲間とのつながりを絶たない、学びを止めない」というFGC、星槎グループ中・高等学校の先生方の強い熱意により開催することができた。

11月14日、規模を大幅に縮小し、オープニングセレモニーとオンラインを組み合わせた「ハイブリッド型」の異例な形で開催された。当日の参加者は、オンライン参加者を含め、約2万人。エリトリアなど6カ国の大使館が参加。アフリカ9カ国、アジア12カ国、ヨーロッパ5カ国、南アメリカ、カナダ、エジプトなどを合わせると30カ国が参加し、大幅縮小にもかかわらず、昨年度に匹敵するほどの参加状況になった。

オープニングセレモニーの特別対談では、「UNDP・JICA・SEISA」代表者から生徒たちに向け、日本の若い人たちが世界との交流を築き、星槎の3つの約束を大切にすることが人間の命や尊厳を守る「人間の安全保障」であると伝えられた。生徒同士が、ユーチューブの「6つのチャンネル」を通じて学びの輪を広げたことは何よりの収穫だったといえる。

SAAB初参加のミャンマー、ヤンキン教育大学付属中・高等学校、テンガンジョン教育大学付属中・高等学校などの生徒たちは、星槎中・高等学校の生徒たちと積極的に文化や教育活動について懇談した。ミャンマーから星槎に留学している生徒たちは、母国に想いを馳せ、懐かしむ姿が印象的だった。ミャンマー国内では、「SAAB 2020 (Japan Myanmar High School Students Culture exchange Program)」で紹介され、視聴者が3万5千人という数字を出していた。コロナ禍で閉鎖的な日々、星槎との交流は明るいニュースであり、生徒たちはより頑張る気になれたという。この事実は、「知<sup>ちけい</sup>繋」というSAABの普遍的価値が広がったとみてよいだろう。

## 3. 国際交流の行く末

本委員会は、これまでブータン王国RTC STARプログラムを通じた文化交流などにより、人間・社会・1人1人に内在するスピリットの三者を結び付けた気高い営みであることを多くの人達に提供してきた実績を持つ。コロナ禍を契機に、国際的にかかわってきた位置（プレゼンス）を冷静に見極め、それに相応しい役割を果たす、それが本委員会のこれからの課題である。今後、プログラム推進のために、文化交流専門家として国際交流を牽引するプログラム・オフィサーの人材育成も必要になろう。

我々が、これからの国際社会で生き延びていくために欠かすことのできない「共生」は、

平和への祈りでもある。ここに国際交流を続ける意義がある。開発途上国に築いた長年の関係を絶やすことなく維持していくために、持続可能な情熱が一層求められる。

## 参考文献

星槎グループ (2018).「SEISA International Exchange Program 30<sup>th</sup> Anniversary Commemorative Book」.  
星槎国際交流誌編集委員会編, pp.10-13.